



雪, 雪, 雪

今年は暖冬かと思っていたところ、先週は結構降りました。特に雪の月曜日だと、道路の渋滞がひどく、ちょっとうんざりしてしまいます。

ところで、雪国生まれなので、雪に対する思い出なども多くあります。まず私の生まれた秋田市は海沿いなので、さほど雪の量は多くありません。ただ、横手市や湯沢市など、内陸部の盆地になると、けっこう一晩に何十センチと積もることもめずらしくありません。関東で積雪があると、歩くのもままならない感じになりますね。**雪国生まれのプライド**としては、雪道ではぜったいに滑って転ぶということはありません。これは特殊な技能でもなんでもなく、慣れの問題です。

小学生の頃、冬になるとけっこう中耳炎にかかって、耳鼻科まで治療に通っていたのですが、医院までの距離があったもので、雪道を歩いて行くわけですが、吹雪の中を歩いて行くととっても寒いので、自然と早足になり、早足でも雪道で転ばない歩き方が身についたようです。どういう歩き方かといわれても、うまく説明できませんが、要は体重のかけ方と、靴で路面を強く蹴らない進み方なのかと思います。



それから、冬の遊びとなると、スキーやスケートをしておりました。未舗装の道路に雪が積もり、かちんかちんに凍ります。今のように滅多に車は通りませんから、自然のスケートリンクができるのです。スケート靴はありません。長靴にスケートの歯を革紐で固定する道具が売っていて、それで滑っておりました。道路はでこぼこ、そしてスケート靴も、けっこうぐらぐら歯が動きます。とても不安定な中でのスケートでしたので、逆にバランス感覚がよくなったようです。普通のスケートリンクで、普通のスケート靴で滑ると、**なんでみんな転ぶの？**と思う位です。同じようにスキーも就学前から滑っておりました。誰から教えられる訳でもなく、雪国の子どもたちは覚えていきます。この歳になっても、多少の急斜面でも、別に怖くなく滑ってこられます。斜面にこぶがあっても別に平気ですが、でも膝がもたなくなってしまうと、別な意味で滑れなくなってしまうました。

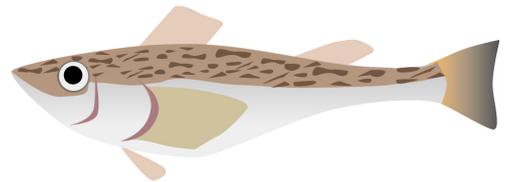
冬休みに目覚めると、子どもの腰くらいまで雪が積もっていたことがあり、玄関から出て、弟と雪の中をモグラのように進んで、迷路をつくったことを覚えています。あの時は楽しかったなど、今でも話題に出ることがあります。

昔の子どもは、こうして雪と仲良くつきあってきました。ですから雪が苦になることはありませんでした。ただ、豪雪地帯では、雪下ろしをシーズン中に何回か実行しなければならず、重労働の



ようです。祖父母が横手に住んでおりました。中学生の時に冬休みに遊びに行ったとき、けっこう積もっていましたので、「よし、俺が雪下ろししてあげるよ」と、二階の窓から屋根に降り立ったら、腰まで雪に埋まり、雪下ろしなどできる状態ではありませんでした。下手な人がやると屋根を傷つけるからと言われ、結局、雪下ろし体験はしたことはありません。でも下ろした雪をどうやって片付けるかが問題なのです。そのままにしておくと、1階部分が全部雪に埋まってしまいますから、それを片付けないといけないのですが、トラックを呼んで、荷台に雪を積まないといけないのです。考えただけで重労働だと想像できますよね。それに雪下ろしには毎年けっこうなお金がかかるのです。

雪のシーズンになると思い出すが、なぜか**ハタハタの生臭い匂い**です。ハタハタが捕れるシーズンになると、魚売りが家々まで回ってくるのですが、当時は箱買いをしていたのです。ハタハタという魚は、小型魚で焼き魚にしてもあまり食べるころはないのですが、雪国では何箱も一度に購入し、それを保存食として、お米と麴を混ぜた物につけ込みます。出来上がった物がハタハタ鮨という訳です。大量買ったものを台所でいっぺんにさばくので、その生臭い匂いと言ったら強烈でした。子どもの頃、母親が作業しているその匂いが大嫌いでした。今では漁獲高も少なくなり、高級魚になってしまいました。暮れに秋田へ帰ると、時々食べる程度になってしまいました。



雪が降ると、町の中は一面真っ白の世界になります。ごちゃごちゃしたものが全部隠れてしまうので、その景色がとても好きです。就学前の頃の思い出として、こんなことを覚えています。おつかいを頼まれて、きな粉を買いに行きました。なんでそうなったのか、帰ってくる途中、きな粉の袋が破れて、中身をどっとまき散らしてしまったのです。もちろんとっても悲しかったのですが、**白い雪の上に、黄緑色のきな粉**がとっても鮮やかで、色彩として思い出に残っているのです。帰ってから母に叱られたかどうか、そんなことは全く覚えてないのですが、その色だけがいつまで経っても強烈なイメージとして焼き付いています。

雪国では、基本的に一度降ると、それは根雪になって残ります。3月に入ると、さすがに暖かくなって、雪が溶け始めます。そうになるとけっこう大変です。歩道がぐしゃぐしゃの雪で溢れます。土の色が混ざった色彩になり、どうもこちらは閉口してしまうイメージです。

3か月から多いところで4か月もの間、真っ白な世界に閉じ込められるわけですから、やっぱり雪国の春は待ち遠しいのですね。今頃の時期は、めったに青空が出てきません。毎日どんよりした鉛色の空を眺めて、雪国の人は暮らしています。ですから、何となく忍耐づよくもなりますね。

雪にまつわる思いで話をつらつらと書き綴ってみました。まだまだ止まりません。でも何故か悲しい気持ちになります。特に何があったという訳ではありませんが、それだけ雪国の人々の生活は大変なのかなと、今思い出していたところです。

さて、まだ仙台では降るのでしょうかね。雪が降ると片平の子は大喜びです。